

<川越市>

無礼者！！「川合善明の姑息な小細工」

2019年12月20日、川越市長・川合善明は自身のフェイスブック「川越市長 川合よしあき」に次のように投稿した。

先ほど、明ヶ戸亮太市議会議員が私の部屋に来られ、写真の文書が川越市議会議員全員に送られてきたようだ、と話して行かれ、文書のコピーを頂きました。明ヶ戸議員さん本人が「全くの嘘。市長に関するこんな話は自分は全く知らない。」と言っています。

ひと月ほど前に、「川合善明川越市長の女子学生買春疑惑があります 斡旋したのが市議会議員 この情報元は〇〇！ 徹底追及して下さい！」と記載したハガキが某所に来たとの情報を貰っています。誰がどのような目的でこの時期に誹謗中傷をしているのか、おおよその推測は出来ています。

仮にも自分自身に噂される「未成年子女買春疑惑」をこともあろうに川合市長として公言する信じ難い愚行と、市議にして会派も議会も飛び越えて市長に媚へつらう明ヶ戸氏の市民社会への裏切りについては本紙既報の通りだ。

だがその後、さらに驚くべき事実が判明した。

川合市長は自らの「買春疑惑」の噂の元となった「ハガキ」をフェイスブックの投稿で紹介している。「情報を貰っています」などと、あたかも他人事のような記述だが、「川合善明川越市長の女子学生買春疑惑があります 斡旋したのが市議会議員 この情報元は〇〇！ 徹底追及して下さい！」との、ハガキの文面をそのまま書き写したと思われる箇所がある。

問題は「この情報元は〇〇！」の部分だ。通常、このような伏字は元の文字数で書く。たとえば元の原稿が「川越市」であれば「〇〇市」と表記することは半ば常識である。そうしなければ、伏字にすることで思わせぶりな心象操作を可能にしてしまう。

12月20日に連続投稿された川合市長のフェイスブックでは、明らかに本紙への敵愾心をむき出しに、この「買春疑惑」を「告発するハガキ」も本紙が黒幕であるかの印象を与えている。川合市長は、本来なら「この情報元は松本！」と書きたかったはずである。

ところが、実際のハガキの文面には「この情報元は〇〇〇！」と、伏字の該当部分は3文字であり、そこには市議会会派の名称が書かれていたことが本紙の調べでわかった。川合市長はそれを知りながら伏字をひとつ減らし、読者に「ああ、この〇〇は松本だろう」と誤誘導させる姑息極まりない小細工をして投稿したのである。これを知った本紙は、フェイスブックにある川合善明の写真に一喝した**「無礼者が！」**まさに川合市長の姑息さは、本紙とこれまでの報道姿勢を愚弄する無礼極まる低劣な行為だ。

川合市長に「告ぐ」…己の「拳」で闘ってみろ！

考えてみるがよい。川合市長は本紙・松本を名誉毀損で刑事告発までしたではないか（不受理）。本紙が常に堂々と川合善明を糾弾してきたからだ。

それに耐えられることが出来なくなった川合市長が防御のために名誉が毀損されたと刑事告発したのである。要するに、本紙は匿名のハガキをねつ造して敵を貶める、フェイクニュースのごとき次元の低い振る舞いを、創刊から現在に至る37年にわたって一度たりともしたことなくない。

いわゆる歯に衣着せぬ言論活動が本紙の信念たる「草民のジャーナリズム」なのであり、だからこそ本紙に信頼を寄せる市民から多くの情報提供もある。

そして本紙では寄せられた情報を鵜呑みにした一方的なバッシングなどはせずに、徹底した取材を元に報道している。事実、本紙は本件「川合市長による未成年子女買春疑惑」について川越市議会に調査して欲しい旨、議員各氏に要望する文書を送付していた。

仮に本紙が本件情報を真っ先に確認していたならば、もって回った「でっち上げハガキ」などをばら撒く必要はなく、川合善明に対しては従来通り正面からの

激烈な糾弾を展開したことだろう。「買春疑惑」の真偽のほどもハガキの差出人も、現在のところ本紙では把握できていない。

だがハガキに書かれていた「この情報元は〇〇〇！」には、3文字で表記される議会会派名が記されているのだから、2文字の「〇〇」ではあり得ない。

川合市長は、「ひと月ほど前」から問題のハガキの情報を把握していたと自ら書いている。これが事実なら、「市長による未成年子女買春疑惑」という重大な懸念を、川合市長は1カ月も放置していたことになる。

あるいは川合氏は「事実無根で、問題として取り上げる必要も価値もないから放置したので」と釈明するだろう。しかしそうであれば、いまになって世界中が閲覧可能なフェイスブックに投稿することは矛盾する。

つまり川合市長は、本紙が市議会に調査要請の文書を送ったことで、なんらかの対策を火急に講じる必要に迫られたところ、絶好のタイミングで明ヶ戸市議が泣きついてきたことを利用したのである。

本紙が市議会に問い合わせた「明ヶ戸市議が市民に語った川合市長の買春疑惑」について、その明ヶ戸市議本人が「全部ウソで私はこんなことは言ってません！」と泣くのだから、川合市長としては「じゃあ、こんなことやるのは行政調査新聞の松本しかない」との愚か極まる身勝手な妄想から、フェイスブックで公開したのであろう。無論、そこに「この情報元は松本！」と書くわけにはいかない。だが読者には「松本」を想像させたい川合市長は、原文にあった3文字の会派名を、意図的に2文字の伏字に書きかえて公表したのである。

川合善明という男は市長権限を振りかざすものの、自分の拳では闘わない卑怯千万な男である。自分自身が、人を利用する倒錯戦略でしか闘うことが出来ない肩書だけの政治家だから、敵も同じレベルだと信じているのだろう。

事実、川合善明市長はこれまで本紙が糾弾してきた川合市政の数々の問題と疑惑について、市民に向けた公人としての釈明や説明責任を果たしてはいない。先の本紙松本に対する名誉毀損の刑事告発でも、市長として警察権力を利用しようとしたに過ぎない。

任意団体・コレクト行政！による川合市長告発記者会見を相手にした名誉毀損の民事訴訟では地裁、東京高裁でも勝訴したものの、控訴審の東京高等裁判

所の判決文（西森政一裁判長 令和元年9月10日判決）には「時に意に沿わない批判を受けることを甘受しなければならない立場にある」と、地方公共団体の長としてのあるべき姿勢を、川合市長に諭すかの司法判断が示されている。

本件についてはコレクト行政！が最高裁判所に上告中である。

すなわち川合善明という人物は、司法からも指摘される市長としての社会的立場と責務の重さよりも、自分の過剰な自尊心や感情が常に優先するのである。百歩譲ってそれでも自身の拳で闘う政治家であれば、まだマシというものだが、川合市長は泣きついてきた市議を利用して、怪情報の出所があたかも本紙であるかに演出するため原文を作り変えるという「ハツタリ」でしか闘うことが出来ない卑怯な人間だ。

川合善明に告ぐ。

自分が卑怯ではないというのであれば、市議会に自ら本件問題を持ち込み、自身に噂される「未成年子女買春疑惑」の真相究明を堂々として行ってみせよ。

それが自分に向けられた疑惑に自分の拳で闘うということであり、それが真の政治家というものだ。



余談だが本紙事務所の近隣にある自治会に、年齢70歳ほどの女性がいる。彼女は容姿端麗、柔和な物腰の淑女にして、一方では鋭い政治感覚で川越市政を厳しく評論する町のご意見番とも言うべき貴重な人である。事情通によれば、この女性が川越市議会のK市議を「育てた」とさえ言われている。K市議は、単に議員たる者の義務感からではなく地域社会の代表として市民に選ばれたという使命感から、町内の清掃や困った人々の相談に真摯に耳を傾けることで「市議会議員の鑑（かがみ）」と地域住民の評価が高い。本紙もK市議の姿勢を高く評価している。

今回、川合市長が「この情報元は〇〇！」とした原文には、そのK氏の所属会派名があった。本紙は、名実ともに政治家であるK氏の所属会派の名を陰で巻き込み利用する、歪み切った精神の川合善明市長に「無礼者」どころか「最低首長」の称号を付与したい。